

第二期 第三十一号 (二版) (無料)

# 音信不通

本のビオトープ

2019.02.20 定有堂書店 発行

身の丈の本屋

奈良 敏行

止まった時間のそのつづきから

南陀楼綾繁

『フェードル』

五島 朋子

還暦の門

萩原 俊郎

アマガエルとプロガエル

ワクサカソウヘイ

図書館事情

芝野 浩貴

書店考、と呼ぶほどのものではない

ムラカミヒロミ

デュオでの演奏

齊藤 仁昭

読書について

戸國 航

注連飾

五百川知子

1773.11

山本千津子

鳥取あれこれ その三十

内田 克彦

シシマ追想

秦阜 梅林

梅

あきの素生

猫と座布団

ドラメリア

…… 編集後記



## 身の丈の本屋

奈良 敏行

(定有堂 店主)

一月二十四日(月)に、大阪・堂島の「本は人生のおやつです!!」(略称本おや)を訪ねた。月曜は定休日なのだが、夕方六時からお店を開けてくださった。久しく会っていない京都大垣書店の平野篤さんやその友人福嶋聡(ジュンク堂)さんとも、再会の機会をご用意いただいた。ご主人の坂上友紀さんは、人をもてなすのが好きなのだ。

福嶋さんは、石橋毅史さんの『本屋は死なない』(新潮社)を読み込み、たくさん付箋を貼っていて、「奈良さんの言葉がここにいくつかある」、「往来」「身の丈」そして「量が質に転じる」、この三つのキーワードが気になる、と発問してくれた。

「往来」は街の本屋の基盤だ。むかし、シンポの中で、「普通の本屋は往来にある、ここに始まる物語を大切に

すべきだ」と語り、安藤哲也さんがとても賛成してくださり、新規のお店に、ちなんだ名前を付けた。

十二月に会ったばかりだったが、鳥居貴彦さんも遠方から遅れて見えた。会が引けた後、鳥居さんは歩いて十五分ほどの、わたしの宿（R&B東梅田）まで送ってくれ、ラウンジで深夜十一時半くらいまで話込んだ。

しかし、鳥取に帰って、「身の丈」について鳥居さんに語るべきだったと悔やんだ。その思いを本当は託したかった。

「身の丈の本屋」って何んだらう？ 日常を大事にする、というか、大事にするのももう日常しかない、といった気づき、これが「初発衝動」だ。そして暮しのなかのサイクルに本屋が入り、オルタナティブとして本屋を生きる。本屋はここで、選びとるもう一つの生き方となる。そして心にも、「普通の本屋」という言葉を据える。普通の本屋は身体感覚を越えない。本屋の「普通」とも言いかえる。

本屋には物語がある。「本屋的人間」という言葉も好んで長く使ってきた、それは「人それぞれに理由がある」という意味だ。理由があるから物語が生まれる。でも本屋の物語は、「小さな物語」だ。「大きな物語」には状況を正当化する背景が不可分にもなう。そんな大きな物語の支えなしに成立する「小さな物語」だ。

身の丈に完結している世界を、外部が解釈すると別のものになりやすい。

身の丈は「狭い」ということだ。「狭い」に関わる特性を二つ思いつく。一つは、ほとんどの場所が終わりの場所でもあるという意識だ。わかりにくい説明だが、「初発衝動」に終始するということだ。もう一つは、狭いから声が遠くまで届かなくていい。声が大きいと、届かなくていいところまで届いてしまう。

この「初発衝動」とは何んだらう。本屋の人間のころのありようをいっている。「自分くくり」に生きることだと思う。「自分くくり」ってどういう生き方だろうか？ 一・何度でもやり直せる。二・身の回りのものを頼りとする。「本屋的人間」って「個性」のことなんだろうか？ 「個性」は「身の丈」のものだ。だから、「自分くくり」は、大きな声にならない。「個性」とは誰にも理解できないものだ。もちろん自分にも。だから「本」を商う。寡黙な人間が饒舌な書物を扱う。日々のたのしさはこの相克にある。

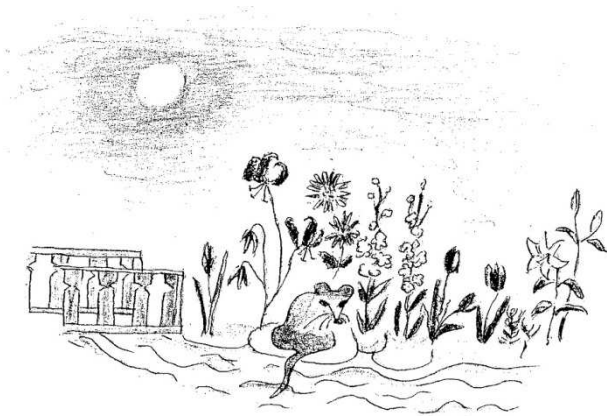
「量が質に転化する」。わたしは「特異点」とか「シンギュラリティ」という言葉が好きだ。本屋は書店から特異点を過ぎて生じる。書店にはセオリーがあるが、本屋にはない。多様な本屋の人間の姿勢があるだけだ。本屋は「人」なのだ。人へとシンギュラリティしていく、

というと奇妙だろうか？

こんなことをいろいろ考えてたら、「あれ？前に、奈良はもう終わりました」ってくり返してたよね、と身近な人にいわれた。

それは、街の本屋に汎用性は必要ないと気づき、「身の丈」から出ることをやめ、「初発衝動」だけを繰り返して反芻するという意味だ。はじまりの場所がおわりの場所、そんなことを話してみたかったのかもしれない。結果を知ることによって原因が発生する、そんな狭い場所の物語を…。

2019. 01. 28



# 止まった時間のそのつぎから

南陀楼綾繁

(ライター・編集者)

いつも気にかけているというわけではないけれど、何か月かに一度、あるいは一年のうちに何度か、「あの人はどうしているかな？」とおもっ瞬間がある。

その瞬間はすぐに過ぎ去ってしまうのだが、その人のことを思い出したという事実は、身体のどこかにとどまっているのかもしれない。

ある土地に行く機会がある際に、なすべき連絡をひととおり終えて、明日は出かけるというときになって、ふっと、その土地に住むその人のことを思い出すのだ。

もっと、早くに思い出すべきなのに、なぜかいつもギリギリだ。それは、その人と私の関係が判りやすい「用事」でつながっていないからかもしれない。

「来週行きます」というメールを入れただけで、当日、その人の店まで行ってみる。まだ店に出ていなかったの

で、近所のレコード屋を覗いていたら、「いま、いますよ！」とメッセージを受け取って、店に戻る。

顔を合わせるなり、その人は「じゃあ、行きましょるか」と外に出て、「どんな店がいいですか？ おしゃれな店と普通の店とどっちがいい？ じゃあ、おしゃれな店で」と独り決めて、行きつけのカフェの階段を上っていく。「どんな店が」もなにも、私とその人と話すときはほぼ100パーセント、その店に決まっているのだ。

以前鳥取にいらしたのはいつでしたっけ？ とか、今回は何日まで滞在ですか？ などの社交的な言葉はいいさき抜きにして、その人は二年前に創刊したというミニコミを取り出す。そして、それを出していくことで何に気づいたかを滔々と話し出す。まるで、止まった時間のそのつづきから再開するように。

前に来たときもこうだったなあと、おかしくなる。何年あいだが開いていたとしても、その人はいつも、前の話のつづきのように話しはじめるのだった。

その人が本屋を開いてから、来年で四十年が経つ。私が最初にその店を訪れてからでも、もう十五年は経つだろう。

それでも、何年かぶりに立ち寄るたびに、前と変わっていないようになじみ深く、それでいて、どこかしら新鮮な印象を受けるのは、その人が「本屋である日々」を

止めることなく、ゆつくりと更新しつづけているからではないか。

「最近、若い人があちこちで小さな本屋を開いているでしょう。あれって、五年後に自分がどうなっているかをあまり考えずにはじめていますよね」

そういう時のその人は、業界の大先輩でありながら、はじめたばかりのひよっこ本屋の危なっかしさを批判するのではなく、「本屋」という世界に飛び込んだきた連中を歓迎し、自分もそうだったと共感しているのだ。

「もうちよつと話したいから」と、私が次に会う人に自ら連絡して、約束の時間をずらしてもらった。そして、コーヒーを飲みながら、またしばらく話はつづくのであった。

一時間ちよつとが過ぎてから店に戻り、そこで少し立ち話をしたあと、「じゃあ、また」とその人と別れた。

その翌日、私は故郷に向かう列車の中で、その手に渡されたミニコミ『音信不通』を読みはじめた。

そして、このちいさいけれど素敵な誌面に、自分も加わってみたいと思って、いまこの文章を書いている。

そうすることで、「止まった時間のそのつづき」が早く訪れるのではないかとおもったから。



# 『フェードル』 一月の観劇…劇団うずめ劇場公演

五島 朋子

(鳥取大学地域学部附属  
芸術文化センター)

職を得て二〇〇五年春に鳥取に引越してくる前は、私は北九州市にある劇団のメンバーだった。役者ではなく「制作」を担当していた。チケット営業をしたり、助成金獲得の書類を書いたり、会場手配や稽古スケジュールやケータリングの手配など地味で細々とした、でも公演には欠かせない裏方仕事だ。ペーター・ゲスナーという旧東ドイツ生まれのドイツ人が立ち上げたちょっと変わった劇団で、天宇受売命(あまのうずめのみこと)にちなんで「うずめ劇場」という。一九九六年北九州市で活動開始。ペーターが二〇〇四年に東京の桐朋学園芸術短期大学演劇専攻科の選任教員となり、二〇〇六年ごろからは活動拠点を東京に移し、現在は2年に1度ぐらいのペースで公演を打っている。

久しぶりの上演と聞き、私も調布市仙川に向かった。会場は、京王線仙川駅から歩いてすぐの「東京アートミュージアム TAM」という個人ギャラリーだ。うずめ劇場は、北九州でも寺の本堂や境内、私設美術館の中庭、ホテルの野外テラスなど劇場ではない場所を公演会場とすることが多かった。旧東ドイツの公共劇場で俳優・演出助手として働いた経歴を持つペーターは、規則に縛られ自由に使うことができない日本の公立ホールで、わざわざ高い利用料金を払って公演をする気にならなかったのだ。もちろん積極的な理由としては、場所と作品を結びつけ、そこでしか上演できないサイトスペシフィックな作品を目指していたとも言える。

今回の上演は、そんな北九州時代を懐かしく思い起こさせるものだった。会場の TAM は、国際的にも著名な建築家安藤忠雄の設計で、彼のトレードマークであるコンクリート打ち放しの小さな建物だ。表通りの長大な壁に穿たれた小さなドアをくぐり、狭い通路を抜けると、細長い展示空間が延びている。天井は高く、壁際の狭い階段を上ると一部が2階となっている。この細長い展示空間の一端に、30余りの観客席が設けられていた。空中に浮かぶ狭い2階も舞台として使い、奥行きと上下の移動という特徴を生かした演出だった。

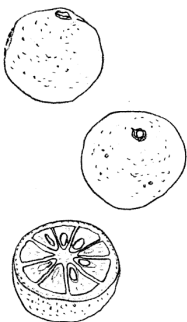
ジャン・ラシーヌ (1639—99) の『フェードル』は、フランス人なら誰もが知る有名な作品だ(と、公演チラシに書いてある)。ギリシア神話をもとに書かれた悲劇\*。英雄テゼーの妻フェードルは、愛の神ヴエニユスの呪いを受け、愛してはならない継子イポリットに恋している。強い罪悪感で苦しんでいたが、行方不明となっていた夫が死んだという知らせがあり、フェードルは想いをイポリットに吐露してしまう。イポリットは断固として拒絶する。フェードルは、彼は高潔さゆえ女性にそもそも関心がないのだと思うのだが、実はイポリットは、父テゼーの敵の娘であるアリシー姫に、想いを寄せていたのだった。そこへテゼーが突然生きて戻ってきてしまう。狼狽し絶望するフェードル。イポリットがフェードルに言い寄ったのだ、という侍女エノーヌの讒言を信じ、テゼーは息子イポリットを追放してしまう。フェードルはイポリットに愛する女性がいたことを知り、嫉妬と絶望のうちに毒をおおって死んでしまう。膨大なセリフ群のつて、フェードルの抑えがたい激しい情熱と、破壊に向かう物語が急展開で進んでいく。

上演では、ギリシア悲劇の英雄も姫も、スーツにジーンズと現代的ないでたちで登場し、時にはスマホも小道具として登場し、カジュアルな印象だ。舞台セットは何も無いのだが、照明で鈍く光る打放しコンクリートの壁

が、逃れ得ない悲劇へ突き進む登場人物たちの緊迫感にふさわしい舞台装置だった。ただ、猛々しくも高潔な若者であるはずのイポリットを演じる役者は、大量の言葉に自分自身が飲み込まれてしまっていた。

TAMでの公演は2月23日で終了するが、今年の8月中旬には、うずめ劇場にとつてのふるさと北九州市で再演の予定があると聞いた。今度は、海辺での野外上演という。真夏の暑い盛りには！浜辺で?!と、ペーターの変わらぬ冒険精神に呆れつつも、なんとか都合をつけて出かけられないものかと思いつけている。

\*伊藤洋訳・ラシーヌ「フェードル」が読みやすい。  
西洋比較演劇研究会編『新訂ベスト・プレイズ 西洋  
古典戯曲12選』論創社2011年刊



# 還曆の門

定有堂東京支店 その①

萩原 俊郎

(新日本海新聞社

東京支社長)

今でこそ「これからは田舎だ、と地方新聞の記者を志して鳥取に」などとうそぶいているが、正直に言おう、十代の頃は東京で暮らしたくて仕方がなかった。

一つは永島慎二の漫画「フーテン」「黄色い涙」の影響。阿佐ヶ谷の下宿から夜な夜な中央線で新宿のジャズ喫茶に通い、朝帰りする「フーテン族」に本気であこがれた(バツカじゃなかるか)。

もう一つは五木寛之の「青春の門」。いちおう文学作品(笑)ながら艶っぽいシーンが適度にちりばめられ、伊勢丹の横で美貌の娼婦に出遭ったり、幼なじみが突然上京して一夜を過ごしたり、「そんなことがわが身にも降りかかったら、どうしよう!」。十代の妄想は文学の高みどころか「形而下の世界」にどンドン広がっていつ

た。

五木は後に仕事で本人にも会えたが、何度かの休筆を経ながら、今も仏教や老いと孤独をテーマに息長く書き続けている。五木を見ると売れる作家の才能とは「マーケティング、時代を読む力」とつくづく思う。

◇ ◇ ◇

閑話休題。ともかく十代つて本当にどうしようもない。実は父親がT大仏文科にいたことも少なからずある。卒業論はA・ランボー。同級生に旧制六高から一緒だった詩人の飯島耕一、後輩に大江健三郎がいた。「何ごとか為すには東京に出なくてはいけない」。父親もそう思っていたのだろう。しかし母親が結核に倒れ、貧しい家計を助けるため在学中から故郷の岡山の地元新聞で働かざるを得なかった。

まあ、形而下の息子のほうはT大に入れるわけもなく、「五木寛之と同じW大の一文でも」と呑気にかまえていた。当時はたつた三教科で受験できた。歴史と国語は楽勝だったが、最後の英語は見たこともない単語のオンパレードで手も足も出ない。知らなかったのである。W大は「Wの英語」と恐れられるぐらい、五木の頃とは比べものにならない超難関大学になっていたことを。

余談だが、同じ高校の文芸部員で「高二コース」の懸賞小説に入選したH君はW大に推薦で入り、本当の小説



家になってしまった(今は妹のほうが活躍しているが)。

で、東京の他の大学はひとつも受けていなかった僕は、滑り止めに受けた京都にあるR大の、しかも畑違いの哲学科に進んだ(先日亡くなられた梅原猛教授は残念、すでにいなかった)。

◇ ◇ ◇

それなりに長く生きていると、人生は自分で選んでいけるようで、実は「見えざる手」によってコマのように動かされているのでは、と思うことがままある。結局、父親と同じ地方新聞の記者になったのもそうだが、そんなことが京都でも起きた。

クラスの初顔合わせで後ろの席にプリントを回そうと振り向くと、そこに小・中学時代、同じクラスだった女の子がいた。家も近所。医者 of 娘で美人だが、僕よりも成績優秀で(小学校の児童会長選では彼女に敗れた)鼻っ柱が強いと来てるから、どちらかという苦手とされていた。しかも僕は高校を一時ドロップアウトして四年いたから、R大の、しかも四十人ほどの哲学クラスで彼女と同級生になる確率なんてほとんどない。が、やっぱり苦手なので(笑)彼女とは四年間なに「ともなかつた。ところが、それから三十年余りも過ぎ、先妻をがんで亡くした僕は、女ひとりジャズと墨彩画を生業として生きてきた彼女と再会。今、僕の妻になつてゐる。

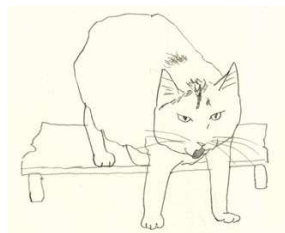
東京暮らしが長かつた彼女を倉吉の家に迎え、暮らし始めたばかりのある日、一通の辞令。

「東京勤務を命ず」

◇ ◇ ◇

東京へのあこがれなんてはるか昔に消し飛んでいた還暦目の男は、こうして妻と入れ替わるように単身、上京した。「青春の門」ならぬ「還暦の門」。『見えざる手』は今頃になつて僕に東京で何をさせようとしているのか。

実を言うと日々たいしたことはしていない(もちろん仕事はしてるが)。蕪村ではないが、ひねもすのたりのたりかな、と言つたところか。それとも、これから何かが始まるのか。そんな僕の東京暮らしをつづつていく。



## アマガエルとプロガエル

ワクサカソウヘイ

(文筆業)

「苦手なものとは多々あるが、特に苦手なのは「酒癖の悪い人」である。

酩酊によってモラルハザードを巻き起こすタイプの人間の、その始末の悪さつたらない。濁った目、攻撃的な態度、平気で人を傷つけるような言動をとり、迷惑なふるまいを続ける。その酒宴のグルーブを壊す酒癖の悪い人は、公害以外のなものでもない。

酒癖の悪い人に欠如しているのはプロ意識だ、と私は常々にらんでいる。つまり酒癖の悪い人は、酒に対する意識がアマチュアレベルなのだ。

プロとはなにか。それは「メ切と対峙すること」である。プロとはメ切を自らに発生させ、そのメ切を守るこ

とによって、自身をプロたらしめている。酒飲みのプロたちは（つまり大多数の人々は）、けっして自分を見失うまでの酒量を浴びない。酒のメ切を自らに発生させ、それを目の前にしてスリリングに酒を嗜むからだ。ところが酒癖の悪い人というのは、酒との向き合い方がアマチュアで、メ切なんてものは作らない。だから一線をいとも簡単に越え、記憶を失うほどに飲んでしまう。

プロにとって、アマチュアほど恐ろしいものはない。そこにメ切がないゆえにアマチュアは、プロでは到底辿りつくことのできない境地へと上昇してしまうことがあるからだ。私は酒癖の悪い人は「苦手」と言ったが、そこには畏怖のニュアンスが含まれている。軽々と狂気の世界へ突入していくアマチュアは、節度を粛々と守って酒を飲んでいるプロたちを、いつも身震いさせているのである。

プロとアマの違いについて、考えさせられる機会がままある。

私は文筆業で、日々メ切に対峙しながら、自らを営んでいる。つまり文筆の扱いについては基本的にプロであると言えるのだけれども、たまにメ切の概念が「無」の状況下での文筆活動を行うことがある。たとえばそれは、『音信不通』での、この連載だ。いや、そりゃ編集人の奈良さんからは会うたびに「次のメ切は○日ですからね」

と告げられているわけだが、なんせ『音信不通』なのだから、急に私からの連絡が途切れてもそれを受け入れてくれるメディアであることは明らかだ。なので、ここで書いている時の私は完全にアマチュアモード。プロとしての張りから一時的に解放され、アマとして泥酔した文章を書いている。

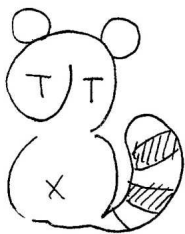
泥酔者、すなわちアマチュアに許されているのは、思いつきを語っていい、ということである。私は今回のこの原稿を、完全に思いつきで書いている。「プロとアマの違いについて書いてみようかな」という、それ以上でもそれ以下でもない思いつきだけを搭載して、一行目をなんの気負いもなくスタートさせている。この原稿のタイトルからも、その軽々しさは何えると思う。

ふと思いついたことを、終電を気にせずに、延々と脈略もなく語る権利をアマチュアは持っている。＼切によって自律しているプロからしたら、それは甘美で、そして危険な領域だ。深くハマると、戻れなくなるおそれがある。

いま、鳥取市が「今夜くらいトットリの話を書いてくれないか」というインターネット配信番組をやっている、うっかり私はその番組のMCをつとめている。市民の人を招いて一緒に鳥取のあれやこれやについてを語り合う番組なのだが、迂闊だったなあと思うのは、私が鳥取人

として半プロ半アマの状態でこのオファーを引き受けてしまったということだ。私の鳥取での日々の中には「何時に夕飯を作ろうか」とか「この日までにお風呂のガス管修理の手配をしよう」などというあまたの＼切が常に含まれており、だから私は生活者としてはプロの鳥取人なわけだが、郷土者としては完全にアマチュア、鳥取という地がこれまでにどういう＼切を設定してきて、そしてこれからのような＼切を抱えているのか、東京から流れてきているのになにも知らない者である。しかし、番組にやってくるゲスト市民の方々は、生活者としても郷土者としてもむろんプロの人ばかり。プロから見れば、アマほど始末の悪いものはない。

プロを迎える以上、思いつきを延々喋るなどというアマの権利をふりかざすことは、はつきり害である。まずはプロの方々に気持ちよく終電で帰っていただく、というのが目下のMCとしての目標である。



# 図書館事情

環ヤポネシア 香港編①

芝野 浩貴

(地球探検家)

台の棚に配置され、香港数学では4色定理・不動点定理・極大極小定理・不完全性定理・フェルマーの定理・オイラーの定理・大数の法則・三平方の定理を必須定理としていることがわかった。農業本は少なく建築本が多い。

「1」が日本に関する本で、地域でいうと沖縄と北海道が多かった。860の東方文学では、村上春樹、太宰治、永井荷風、芥川龍之介、東野圭吾、大江健三郎などの著書が目立った。主に9階のレファレンスブックに滞在して感じたのは、図書館に関しては一國二制度は二刀流として機能しており、オックスフォード・ケンブリッジ大学出版物や中国史記など漢文と英語の学習も兼ねて、西洋と東洋の比較をしながら碩学的に学べる環境であるということだ。陳省身(チャーン)の文集も素晴らしかった。

「A world is my book」の文字を見た時、我が意を得たりと思った。銅鑼湾にある香港中央図書館(第2次世界大戦退役軍人宿舍の隣)の玄関に飾ってある地球儀に書かれている言葉だ。玄関までの階段には各国文豪の読書に関する諺が刻んである。水曜以外は10時から21時、水曜は13時から21時、祝日は。時から19時開館で新年とクリスマスが休館。「2階児童館、3階一般貸出、4階新聞・雑誌、5階最新新聞雑誌、6階視聴覚、7階書庫、8階香港文学、9階社会科学・自然科学・人文科学・商業レファレンス、10階芸術レファレンス、11階ヘッドオフィス」

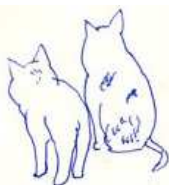
図書分類を大雑把に記すと日本の100(2900)番台が、それぞれ、日本の100は香港の100と200、200は600と700、300は500、400は300、500と600は400、700は900、800は800、900は800に置き換えられる。専門の数学は310番

香港に入国したのは、中国・香港・マカオを繋ぐ世界最長の55キロの橋が開通した一ヶ月後の事だった。ちまたでは、空路・海路でなく陸路として、元ポルトガル領から元イギリス領を経て中国内陸へ突き抜け、ローマの道ならぬ「全ての道は北京に通じる」という世界覇権の象徴だと囁かれている時だった。(奇しくもフアードウェイ事件が…)

鳥取からも直行便は出ているが、格安航空券を使用したので福岡経由で香港空港に着く。

情けない後日談だが、外貨両替を都内で行ったため、航空券より両替手数料の方が高くつくという失態をしてしまった(無職の私にはきつい出費)。若手人口増加率ナンバー1の福岡は沖繩とともに、いろんな意味でこれからの東アジアのハブになると思う。オクトパスカードと呼ばれる香港版SIM卡を150HK\$(1000日間有効)で購入し、エアポートエクスプレス(10HK\$, 25分)で九龍駅まで移動しヴィクトリア港目指して歩く。宿はアイスクエアというショッピングセンターの真向かいのビルだったが、辿り着くまでに何度も男の人達に付きまとわれる。花街への誘いではない。安宿に案内するという呼び込みの人達である。彼らにしてみれば生活がかつてから必死である。かつては犯罪の温床であったアパート群のあるところで、香港一の繁華街のネイザンロード沿いの重慶大廈もアイスクエアを挟んだ反対側にある。真珠湾攻撃と同時に香港侵略した時の本部であった。ニンシユラホテルもここにある。海側の海港城にはシャネル、ルイビトン、エルメスなど揃い踏み。バックパッカーの聖地であるが、富裕層も高級ホテルに泊まっているので経済格差を押し込めた街である。九龍公園には香港最大のモスクもある。イスラム系の人が多い。九龍モスクのインド・パキスタン人はイギリス領インド帝国からやってきた警官・兵士・商人の子孫である。コンビニ、商店、ショッピングセンターと覗いてみるに、スラスラと読める広告・案内が多く、我に帰ると日本語を読んでいること

がしばしば。○○。壱や山頭火や丸亀など日本店が多く進出し、出前一丁を中心に麺類やお菓子など日本産が多い。ちなみに日本が香港を占領していたのは1941年から3年半である。1857年南京条約で香港島が、1860年北京条約で九龍半島の一部がイギリスに割譲されたが、その当時や返還までのことはもちろんのこと、1997年1月に中国に返還されてからのこともほとんど知らない。当時の同僚が返還前に香港を見てくるといつて飛び立つてから22年後、ヤポネシアを取り囲む香港の街を一昨年の台湾に続いて歩いてみた。日本が移民問題に悩む時、韓国、台湾、香港の問題は国家とグローバルゼーションの狭間に揺れるものとして、共有・参考にすべき事だと思う。ボヘミアンラプソディーの興行成績よりも科学者でもあるブライアン・メイの辺野古珊瑚擁護に、各国首脳の嘘よりもオバマの映画「万引き家族」の推奨に、忌野清志郎の亡霊は降りるだろう。そういうえば、小説「珊瑚」を書いたのは山の作家新田次郎であり、「珊瑚は辺境の隠喩である」と言ったのは、宮本常一である。中国国歌を歌わない香港人に対する政府の取り締まりが始まった。



# 露店考、と呼ぶもののしなない

△フカミ ヒロミ

▽ライオン・ブックマン

雨が降る。

どんよりとした鉛色の空が広がる。

曇りが混じる。

寒波が来れば、いよいよ雪となる。

秋から春先にかけて、そんな毎日だから、およそ露店には向いていない土地柄だ。

花見シーズンの屋台と、盆・正月の花立、注連飾り売りを除けば、露店らしい露店はなく、あってもアーケードの下でささやかに店開き、というのも宜なる哉。

近頃は、良いテントができて、フリーマーケットなども開かれるが、気候の良い季節に限られる。

そんな塩梅だから、昔見られて、今はない露店というもの、そう多くはない。

扶桑相互銀行前（現・山陰合同銀行鳥取営業部）の広場で、年の瀬に、いくつもの屋台が簡易なテントを張って、衣料品やら生活用品やらを山と積んでいたのを覚えているくらいだ。

同銀横の路地には、冬になると名物おばさんの焼き芋の屋台（リヤカー・タイプの）が出るのも風物詩だった。そうそう、鳥取銀行前（現・パレットとつとり）には鯛焼きの屋台も出ていた。

新橋端に移動した盆の花立、注連飾り売りも、かつては若桜橋の袂で商っていた。

たまに東京などを歩いてみると、スポーツ用品店、楽器店どころか本屋まで路上に店を広げている。（どの界限を歩いているか、分かりますな）羨ましい限りだが、まあ、面積当たりの賃料が高い、という事情もあるう。

しかし、つらつら思い出してみると、そもそも昔の商店は、通りに店を開いていて、ドアや戸はなかったのではなかったか。

昭和三、四十年代の古い映画を見ると、店を仕舞う場面、木戸を立てているのをよく見る。土産物屋も下駄屋も洋品店も。ちよつと気の利いた店がシャッターになっ

ていたりする。

今や、そういう佇まいが見られる店は、本通りでは果物屋と鞆店と緋屋くらいだろうか。

横道や路地に入れば、稀に八百屋や肉屋など、そういった店を見かけることがあるけれども。

米子のA書店は、今でも戸のない、陳列台を舗道の上まで広げた、昔ながらの商いスタイルである。まあ、パサージュ式のアーケード街だからできることではある。天候が安定しない山陰では、屋根がないと厳しい。

軒下にビニールテント式の屋根を収納している店は多かった。

川端の角に、レストラン、パラー、菓子屋が入ったビルがあったが、角店だから、一階の菓子店部分は二方が素通しであった。冬場は、さぞ寒かったことだろう。

定有堂ビルも、以前はガス会社のショールームで、給湯器や炊飯器が並んでいた。そんなことが分かるのも、歩道側も初音通り側にも、壁がなかったからである。

本屋も、駅前の大丸向かいにあった、間口一間ほどの

M書店は、雑誌の台を外に出していた。雨の日は、ビニールシートを被せていた。

本通りのH書店は、戦前からそのままのような、昭和四十年代にあつてさえ、レトロスペクティブで、平台上に雑誌が並んでいるだけ、天井から紐を吊って神宮曆をぶら下げているような店だったが、間口一杯開いていて、歩道から通りすがりに手に取り、買える店だった。

移動しない露店といつてもいいくらいの佇まいだった。智頭街道にあつたF書店の本店も、角店で二方が開放してあつた。子供の胸くらいの高さがあつた雑誌用平台が懐かしく思い出される。

本屋が、ドアを開けて入るようになったのは、何時頃からだつたらうと考えてみるに、たぶん昭和五十年前後、相次いで店舗改装が進んだ頃だつたように思う。エアコンの普及が背景にあつたことは間違いない。

いつまでも、扇風機とストーブでは、客も寄り付かないだろう。立ち読み防止には効果的だったかも知れないけれども。

# デュオでの演奏

坪井日記 ⑬

齊藤仁昭

(長崎書店)

椎名純平さんのバンド、UNDER THE DOGS が熊本でライブを行うということで、会場であるナバロの店長からしみずけんた君に「バンドを組んで共演するように」とのオファーが出ており、縁あってけんた君からドラムをやってくれと声を掛けてもらった。けんた君はコロリダスや、チリンとドラム&しみずけんた、offTropicque などのユニットで活躍するニュージジヤン、ソングライターで数年前から熊本に移住して来た人。どのユニットもとてもクオリティが高くかつ、楽しい音楽を演奏している。自分にちやんと演奏できるか不安だったが、せっかくの機会なので受けさせてもらった。(オークラ出版から最近『lapalma』という作品が出たので是非聞いてみてください。オタニジュン氏のアートブックにoffTropicque のCDが付いているという体裁。造本も面白いです。書店で注文できます。)バンドなのでベースも見つけないといけないんだけど、のんびりしているうちに日も迫ってきたのでひとまずデュオで練習してみたところなんかいい感じだったのでそのままいくことにした。

ケバブジョンソン以外での演奏は何年振りかわからないくらいだし、デュオも初めてなので緊張するので何か参考にできるものはないかとyoutube を彷徨った。ジョンサン・リッチマンがドラムの人とデュオで演奏しているライブ映像があった。ゆるゆるだし、二人なので自由度が高い。聴き手の方も演奏に参加できず、二人ならではの余地がある。これだ。曲を覚えられずとも、途中で止まろうともそれを瞬間的にアレンジとして取り込むのだ。

けんた君は中南米の音楽の要素を多く取り入れている。何か持っている音源で参考になるものはないだろうか。NOVOS BANANOS『Acabou Chorare』を聴いた。自分はロックっぽいドラムアプローチしかほとんどできないのでこれも参考になる気がした。Iran Lins の『A Noite』を聴いた。イヴァン・リンスは美しくて参考にならない。が聴きたくて聴いた。6曲め「Antes Que Seia Tarde」が特に好きで、Aメロのコーラスの美しさは異様なほどでどうやって書いているのだろう。もうこの曲ばかり繰り返し聴きまくった。美しい音楽はある。美しさへ手を伸ばす気持ちで演奏に反映させよう。メンタルも大事だと、アマチュアなりのアプローチである。

当日は、大変楽しく演奏できた。そしてUNDER THE DOGS の演奏がすばらしかった。パーカッションのEPONさんに特に釘付け。自分はパーカッションも全然できないので、今年は少しトライしてみなきゃ。ダニー・ハサウェイのライブ盤の what's going



DJのカバー、のカバーが特にグツとききました。このライブ盤も聴きなおすたびに良いですね。ライブの理想。

DJもナイスで、3時まで飲んでしまった。翌日の早番は眠すぎたが、その日は栗原康さんと森元斎さん、中里勇太さんの鼎談『半島のアクチュアリテイ』が長崎書店で開催されたのであった。滅法面白く、さらに打ち上げにも呼んでいただきまた飲んでしまった。当然妻は「機嫌が悪い。申し訳ない気持ち。よって今日は晩御飯を一生懸命作って食べてもらった。」

また肩で風を切り裂いた

僕はいつも君が好きで

小さな飾りを縫い付けた

僕は君が好きだ

時計の針だけ眺めてた

僕はいつも君が好きで

後悔の数を数えては

今日も眠りついた

賑やかな影を追いかけた

僕はいつも君が好きで

神様も全て連れ出した

僕は君が好きだ

頭の中では口づけた

僕はいつも君が好きで

恐竜の声でささやいた

僕は君が好きだ

ハロー 春になれば

また君に会える

あの曲がり角から

聞こえるよ あの声か

また肩で風を切り裂いた

僕はいつも君が好きで

恐竜の声でささやいた

僕は君が好きだ

優しい話を聞かせてよ

僕はいつも君が好きで

宇宙の話を聞かせよう

僕は君が好きだ

(ケバブジョンソン「テイラノサウルスセックス」作詞・杉浦真寛)

# 讀書について

戸國 航

(鳥取西高二年生)

最近、マルティン・ハイデッガーの「有と時」を読み始めた。しかし、これがまた難解な書である。私は百ページも読み終わらないうちに疲れ果ててしまった。

西洋の形而上学についての知識が浅すぎたためである。私は岩波思想辞典を片手に読み進めている。この辞書は、難解な哲学書の内容の周辺知識を得るのに丁度よく、まことに良書である。また、私は読書するときは手帳を必ず手元に置くようにしている。これは新たな用語であったり概念であったりが出てきたときに、それをこぼれおちさせないように、いわばあわてて書き留めるためだ。一冊読了してからノートにまとめるとよいとも一般的に言われているが、どうやら私には手帳に書き込みながら読み進めるのがいちばんあっているようである。その方が本に没入することができる。そうして読んだ本はなかなか脳裏から剥がれ落ちない。

脳は入力するよりも、出力するほうが記憶すると、どこだかの脳科学者が述べていたが、まさしくその通りで、本の内容を手帳に書き込むときとその内容を人に紹介しているとき、どんどん記憶に定着するのを感じるのである。

また、難解な哲学書を読むときは、どうしても内容に没入できなければ、速読するようにしている。そうして全体の大体の流れをつかんだ後に、もう一度繰り返し読み、場合によっては四、五回繰り返し返す。こうすることでだんだんと記憶の層に内容が沈殿していく。「読書百遍おのずから意通ず」という言葉もある通り、反復こそ読書の本道である。悪書は読み飛ばしても構わないが、良書は何度も精読する必要がある。私の知人に十三歳でニーチェの「権力への意志」を読了してしまった猛者がいるのだが、彼が言うには、どんなに難解な書であつても何度も読めば忘れないとのことであつた。

それはさておき、私の最近の悩みは読書量である。私の読書量は少なく日に数冊しか読めていないのが現状である。ニーチェなどは日に二百冊は読んでいたというから驚きだ。今年に入ってから私が建てた目標は、私の目

標は大学に進学するまでに一万冊読破するということがあるが、これは大変に難しい。日に数十冊は読まなくてはならない。私はよく、いささか誇大な計画を立ててしまっているので、これは半分冗談としなければならぬだろう。だが一年で千冊は読みたいと思っている。しかし何故あなたは本を読むかと問われたとき、私は了見のいく答えを有していない。若さゆえの盲目的な智の欲求とでもいうべきであろうか。それも腑に落ちない。ただ何かにかられるようにして、ただ焦っているのである。ただ読書をしているときは、大変自分が自由であると感ずるといふことだ。日々のしがらみや喧騒を忘れて本は新たな知見を提起してくれる。最近一段と読書が好きになった。その感傷は私の人生にとつてまことに有益なものであるうと漠然ながら確信している。十年後も本とともにいられる生活を続けているならば、私はそれ以外に何も望まないであろう。

## 注連飾

注連飾古き土蔵を護りたる

風花の不意に箱根の男坂

晩学の道照らされし福寿草

積もりたる雪に小枝の雪落下

住む明かり見えぬ旧家や寒の月

定有堂教室「読む会」 毎月一回 次回 二月十九日(火曜日)

テキスト 原田泰『ベシック・インカム

― 国家は貧困を解決できるか』(中公新書、2015)



五百川 知子

アシル



## 山本 千津子

(ROSHKA コーシカ)

大規模災害が起こった時、一瞬で生死が決まる、その後の人生が大きく変わる。被災者となった人々の悲しみ、苦しみ、記憶は消えることはない。直接被害に遭わなかった私もこの日が来れば思い出す。今年「音信不通」という場をいただいて文章にしてみたい。

阪神淡路大震災の起こった前日の夜、2年前にウラジオストクに語学留学をした同じグループの一人と神戸で会った。彼女は泊ることをすすめてくれたが、新大阪駅近くに住んでいた妹の部屋が一週間空いていたので、そこに泊ることに決めていた。そして午前5時46分、ベッドから落ちるほどの激しい揺れでマンションの外に飛び

出す。知らない人ばかりであったが、皆が、「怖かった」「かなり大きい地震だ」「どこが震源か」と不安を感じながら、ただ立っていた。コートを取りに部屋に戻って、また路上に出たが、周りの人たちは順に帰って行った。そして私も予定されていた大阪市内での面接はなくなつた。兵庫在住の社長さんは無事であったが、会社まで出勤できない。次にいつ面接があるのかわからない。翌日、私は兵庫の自宅まで山陰本線経由で何とか帰った。連日テレビの前にいた。父は私にボランティアに行つて、「いい」と言う。私は友人知人の安否確認をするだけ。あの夜、神戸で会った友人は、狭い窓から逃げ出して避難所に入った。もしかしたら私もそこに、いや小柄な彼女は逃げ出せたが、ロシア帰りの70キロを超える私が抜け出せなかったは疑問であるし、倒壊していたら……

ウラジオストクから安否を尋ねる電話やファックスが届く。アルバイト先だった会社のロシア人社長から、戻ってくる気持ちがあれば、ビザを出して働けるようにしてあげるとの提案。日本で安定したお給料がもらえるところに就職したいとの理由で辞めてから一か月も経っていないのに、私は日本から逃げるようにして再びウラジオストクへ向かった。現実から目をそらして、自分ひとり生きていけるところへ逃げた。その後、ロシア人社長

は大学卒業と同時に日本企業に就職が決まり、東京へ行ってしまい、会社は閉じられた。私は幸いにも現地の日本の団体に拾ってもらえた。

あの時ボランティアに行かずに、そして毎年の鎮魂の日を思うことなく、2000年に帰国するまで、あの日は遠のいていた。帰国後、旧ソ連中央アジアから日本の災害対策を学びに来ていた研修員とともに神戸の「人と防災未来センター」を毎年訪れ、追悼の日には東遊園地へ行くようになった。それでもやはり、あの時、父の言葉に従わなかったことが悔いに残る。今は、自分の体力や身内の介護を理由に行かないだろうし、災害ボランティアへのこだわりもない。

東日本大震災は、津波よりも放射線物質による被害の方が海外では大きく伝えられたのだろう。ロシアからドイツに移住した知人も、ベラルーシーにいる知人も、極東のウラジオストクからヨーロッパ側のモスクワやサンクトペテルブルグに引っ越した知人も、皆同じく、「しばらくの間、航空券だけ買って僕たちのところへ来るように」と言ってくれた。そして皆が、放射線測定器を送るとの申し出をしてくれた。

3. 11という日付よりも私にとつては金曜日だったことの方が記憶に残っている。週明けの月曜日の面接に備えて、髪を切りに行ったり、洋服を準備したり、何を聞かれ、どう答えるべきか、緊張していた日でもあった。鳥取でのこの面接に震災の物理的な影響はなかったが、準備するはずの2日間の精神状態は全く違ったものになった。津波の恐ろしいエネルギーにすべてのものが飲み込まれていく映像を何度も目にして、面接、仕事か、そんなことよりも私は子供が産みたい、という本能が現れてきたことにびっくりした。身体がこの危機を感じた時、子孫を増やすという答え、いや命令とも聞こえるような声を発したのだ。鳥取に向かうバスの中でも津波の映像が頭に浮かび、面接なんてどうでもいいや、と思っていたが、ありがたいことに、この面接のおかげで鳥取とのご縁、そして奈良先生とのご縁にも繋がりが嬉しい限りだが、あの時の遺伝子からともいえる声は再び聞こえてこないし、そのご縁には恵まれず、子どもを産むという機を逃してしまった。

被災していない者にとつても何かしら思い出させる数字である。



# 鳥取あれこれ その三十

内田克彦

(地域研究家)

りたい意向があつたようだが、これを断念させたのは鳥取県の政・財界の大御所、米原章三氏であつたと思う。(略) 沢田氏も立派な人で、いきさつなどにこだわらず私の応援に加わってくれた。

(承前)

澤田廉三は政治家たらんとして一九五三年四月二十四日に実施される参議院議員選挙に出馬すべく準備を進めていたが、国連大使の話が持ち上がったため、断念したとされている。一九五三年三月一日付けの「日本海新聞」一面に次の広告を出している。

期する所あり、参議院選挙に出馬致しません但し私の過去の経験を活かし以て日本再建の為に不断の努力を捧げる  
ことには変わりありません。

三月一日

澤田廉三

しかしながら、前年となる一九五二年十月一日の衆議院議員選挙で初当選した古井喜実は『山陰生れ一政治家の人生(私の履歴書)』で次のように書いている。

この選挙には、はじめ沢田廉三氏(のちの国連大使)もや

廉三が公職追放解除されたのが一九五一年であるから、一九五〇年一〇月に公職追放特免された古井と同じように、最初の国会議員選挙となる衆議院議員選挙に出馬しようとしたとしてもおかしくはない。  
当時の日本海新聞を当たってみると、

『昭和27年2月5日』新日本政治経済会主催の時局講演会は四日午後三時二十分から鳥取市遷喬小学校講堂でひらかれ、吹雪について聴衆約六〇〇人が参集まず「冷戦の行方」と題し沢田廉三氏(元外務次官)が壇上にたち、ついで矢部貞治氏(元東大教授、法博)「独立日本の政治課題」古井喜実氏(元内務次官、現地方自治協会会長)の「今後の内政」三好英之氏(元代議士)の「政界の情勢」と題する講演があり全聴衆に多大の感銘をあたえた。

『昭和27年2月10日』民主党、新政クラブ、農協党などを中心とする改進黨の新発足で鳥取県民主党の動きが注目されているが、県支部主流はいずれも傍観的態度に出る模様である。(略)米原章三(略)、奥田憲太郎氏ら県下の民

主党主流派は最初から三木武夫(略)氏らの主導権下に入ることを避ける態度(略)また古井喜実、三好英之氏らの組織する新日本政治経済研究会も新党の動きには協調的でないといわれ(略)

『昭和27年4月26日』三好英之、古井喜実氏らの組織していた新日本政治経済研究会は解消し、新たに日本再建連盟を組織し十九日東京で発会式をあげた。理事長は三好氏で理事は古井喜実由谷義治氏等八十六人、顧問に足立正、重光葵、岸信介氏ら二十人を推し、憲法の改正、共産主義排除、日米経済の提携、産業振興など五つのスローガンを掲げている。

なお、『米原章三伝』に興味深い記述がある。一九四二年四月三〇日の翼賛選挙時、米原は翼賛政治体制協議会鳥取県支部長であり、新人を推薦する限りは当選させねばならなかった。

心当りのある人物は居ないでもなかった。鳥取県岩美郡出身・前フランス特命全権大使澤田廉三である。(略)章三は早速、澤田廉三の意志を尋ねてみた。だが、返事は「各自信念の違う処」(26)という否定の答えであった。

注(26)昭和十七年四月八日付、沢田虎蔵より

米原章三宛の手紙

米原章三の働きかけがいつ行われたのか明らかではないが、過去の経緯も頭の片隅に残っていたのかもしれない。

因みに、『澤田廉三と美喜の時代』で、長男である澤田信一は「父の思い出」において次のように語っている。

「澤田廉三が出たんじゃ、ちよつと危ないぞ」というのが自民党の本部の方にあつて、「これをなんとかできないだろうか」といつて国連の正会員でない日本国代表としては困難かもしれないが、そのオブザーバーというのを設けたという話を隣の部屋で聞いていた外務省の方が私に告げてくれましたから、これは間違いがないです。ただ、あの当時の参議院の選挙では誰がそういう手を使つて父を退かしたかも知りません。

当時はまた自民党は創立されていないのでその点は間違いであるが、三年前の一九五〇年の参議院議員選挙では社会党の中田吉雄が大差で初当選しているため、厳しい選挙となることが予想されたのだろう。結局一九五三年の参議院議員選挙は前年の衆議院議員選挙で落選した三好英之が当選している。

(以下、続く)

二〇一九・一・二八

## ミシマ追想

秦阜梅林（やすおかばいりん）

（楽人）

芥川や太宰と違ひミシマの最期を「覚えてゐる」僕には異様な焦燥感と共に「あの日」の印象が鮮烈。フラッシュバックのやうに蘇へる、劇場型事件の黎明期。往事8歳だったけれど、予々子ども心にエクセントリックと感じてゐた：未だ若さを残しギリギリ伶俐な男が作家で、新聞に小説を書いてるミシマだと云ふ事は解つて居た。何を考へ何に憂い悩んであのやうな一連の行動に出たのか？ 知る由も無い、そして作品を読む事も無論無い儘トウラウマに成つて了つた、彼の存在とあの日の記憶、時代の焦燥一切が。：なんか気味悪い、怖ろしい、聡明過ぎ殆ど狂気に近く、徒に劇的過ぎ、芝居じみた、救いと希望の無い閉じた世界。誰からでも無い想ひ込み、刷り込みに封印されて。

以後高校時代「午後の曳航」を宿題の感想文に綴り、「散々に貶したつもりが、オタクの権化みたひな若い国

語教師に激賞され不可解でならなかった」事を唯一の例外として、作品を読む事は勿論、彼に就ひて語られた物等にも一切、目を通す事を自然避けるやうになった。

後年黛敏郎先生と、ある協議会でこゝ緒させて頂くやうになつて、「この鷹派の泰斗がミシマに就いて論じはじめられたらどうしやう？」唯々憂鬱だった。だからドビュッシイやリスト、ストラヴィンスキー（当時、解らなひ、苦手だった作曲家のリスト）とは亦違つた意味で生理的に受け付けなひ作家、そんな存在に成つて了つた。

留学時代を含め何度も春が亦冬が巡り、40代半ば過ぎて演劇の仕事絡みでミシマの戯曲に初めて接するやうになった。時代は平成に、あのミシマは既に古典に限り無く近い存在に成つてゐた。直接彼の文章に附曲（作曲）編曲、或いはアリモノの選曲と云ふ形で従事してゐる訳では無いが『近代能楽集』を劇団が採り上げ幾つかの芝居がレパートリーになった。※時がいつのまにか僕の拒否権を自動解除し、現在の僕にとつて彼は寧ろ「新鮮な」作家。あのギリギリした軍服姿の彼より既に一回り以上、凡庸で無為な日々を送つて了つて。



ミシマは真摯過ぎ過敏だった故に「いったい絶望する  
より外の道が無かったのだらうか？今は勿論あのギラギ  
ラ、狂気にさへ想へたミシマの焦燥、そして絶望に怯へ  
る事も無ひ、否寧ろ、彼を追い詰めた側にこそ…。

現在職場で、既に「古典」と成りはじめたミシマの、  
昭和からの声に訊いてゐる、静かに。人工の美、強烈な  
美意識、耽美に偏りコムプレックスに彩どられた「或る  
想ひ」が生きた人の声に載って繰り広げられる。櫻の蕾  
未だ堅い鹿野に。

平成 31 (2019) 01. 14.

※鳥の劇場2月公演「葵の上」斑女／熊野／綾の鼓」  
(2月22日～3月3日) 訊 0857 (84) 326  
8

【今回の一冊】 三島由紀夫「近代能楽集」(葵…他四  
作を含む) (新潮文庫版)

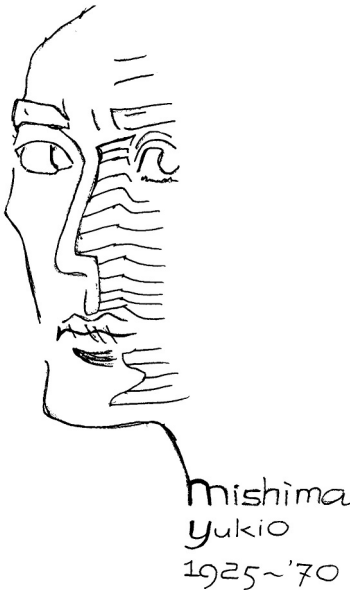
【今回の三枚】

① C.ドビュッシー／前奏曲集第1集 (12曲) (1909

～10) 第2集 (12曲) (1910～13) S.フランソワ pf.  
(rec. パリ 1968～'69)

② F.F.リスト／第1P.F.協奏曲変ホ長調 S. 124 (1849～56)  
D.リパティ P.F.F.アンセルメ指揮 スウイス・ロマンド響  
ジュネーヴ 1947. 6. Glive

③ I.ストラヴィンスキー／管楽八重奏曲 (1922～23)  
L.バーンスタイン指揮 ポストン響のメンバー (rec. 1947)



画. A. T

# 梅

あきの素生

(くうねるめがね)



好きな花は、と聞かれたら、まず「梅」と答える。梅の香りが好きだ。白梅の可憐なすがたも。

梅の香りのいいことに気付いたのは、小学生の時だったと思う。通学路に、大きな白梅の木があった。黒くこつこつとした幹に、同じくこつこつとして、所々で、かくかくと曲がった太い枝が生えている。そこから、すつと伸びた細い枝の先に、白い花がぼつぼつと咲いているのを、何の気なしに見上げながら、小学校に通っていた。そんなとき、たまに、甘い香りがふつと漂ってきて、なんだかこの辺りはいい匂いがするなあ、とぼんやり感じたものだ。

梅の香りは不思議だ。もっと嗅ぎたいと木の下で立ち止まっても、思ったように嗅げないことが多い気がする。本当にたまに、「ふっ」と香るのだ。だからこそ、よりいっそう惹かれてしまう。

けれども、やはり浴びるように、梅の香りを目一杯堪

能したい。一時期、その気持ちが高じに高じたことがあり、とにかく梅がたくさん咲いているところで梅見をしよう、と思いついた。調べてみると、山全体が梅林になっているような名所があるらしい。家からは500 km以上離れている。免許を取ってまだ2〜3年の頃で、そこまでの遠出をしたことはなかったが、梅見をしたい一心で、えいやと出かけた。

交通量の多い高速道路、初めて走る土地、地図を確認するために度々停車しながらの運転は緊張しどおしだったが、そのうち、「道はつながっている」「ここは日本だ。日本語が通じるんだから、どうとでもなる」と妙に勇ましい気持ち湧いてきて(緊張しすぎてやけくそだったのかもしれない)、目的地に近づくころには、ずいぶん凶太いドライバーになっていた。

梅見の名所は、白、紅、淡紅色の梅が取り取りに咲き、見ごたえ充分だった。人出は多かったが、桜の花見のイメージとは違い、騒がしさは全くなかったように思う。記憶にあるのは、暖かさを含んだ柔らかい日差しの中で、梅の木を見上げながら、にこやかに、のんびりと散策している人たちの姿だ。

肝心な香りというと、残念ながら、そんなに印象に残っていない(途中の茶屋で梅ジュースを飲んだことは覚えている)。あれほど梅が咲いていても、求めていた

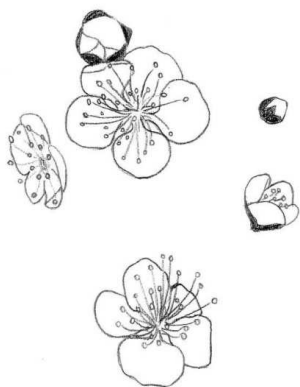
ほどには、香りにどっぷり浸かることはできなかったということがある。なかなかにつれない。

それから数年後、実家の桜の木が台風で折れた。私の背丈より小さく、花が終わると、さくらんぼを実らせるかわいらしい木だった。それだけに悲しかったが、桜の木がなくなつてぼっかり空いた庭の一角に、梅の木を植えることにした。梅の木がわが家にやってくるということで、俄然張り切った。「桜切る馬鹿、梅切らぬ馬鹿」という言葉を知り、剪定の仕方を調べた。いつ切るのか、どこをどのように切るのか。自分なりに力を注いで世話をしたが、そこは素人の真似事、数年経つと珍妙な枝ぶりが目立つてきた。狭い庭の中で、今後この枝どうするの？という箇所もある。枝が太くなつてきたこともあり、だんだん剪定するのが難しくなつてきた。夏にも少し切るのだが、本格的な剪定は、秋が終わり葉が落ちてから、とどこかで読んだとおりに行つてきた。だから、剪定するときは基本寒い。剪定ばさみで切れない枝は、のこぎりを出してきて、えつちらおつちら切り落とす。作業に何時間もかかつて、体が冷え切り、手がかじかんでも、年明けにたくさん花を咲かせてくれるとうれしかった。そうこうしているうちに家を出ることになり、今では家族が世話をしてくれているのだが、一昨年の年末、家

に帰つて驚いた。枝がほとんどなくなつていた。決して「梅切らぬ……」にはならないという強い決意すら感じた。残つた枝に、蕾が2、3個だけ付いていて、梅の木の今後を案じた。

けれど、この年末、梅の木は鈴なりに蕾を付けていた。あの思い切つた剪定は功を奏したのだ。梅の生命力に感嘆し、やはり梅の木は切らなければいけないのだなあと、つくづく感じた。

鳥取の梅といったら「野花豊後」だろうか。以前梅酒をいただいたが、美味しくてすぐに飲み切つてしまった。今年はずい湯梨浜町に梅見に行きたい。



イラスト・あきの素生

## 猫と座布団



ドラメリア (座敷わらし)

先日、初めて高速バスに乗った。重度の乗り物酔い体質の私にしてはスムーズに目的地に着いたのだが、降りると身体が痛い。寝落ちして以後ほとんど身動きしなかったからか、車中が思いがけず寒くて筋肉が固まったのか、首も肩も背中もとにかく痛い。

ギンギンきしむ身体を伸ばしながら、時間潰しに入っただ大型雑貨店で、すごい座布団を見かけた。座布団……正確に言うなら「骨盤サポートチェア」という商品らしい。椅子などに置いて座るだけで自然に正しい姿勢へ導き、腰の負担を和らげてくれるそう……なんといまはそんな便利なものが。座り姿勢を猛反省している最中だったこともあり、思わず展示品を試してみると、これが実に快適。腰がしつかりホールドされて楽し、自然に背筋が伸びる。あまり気持ち良かったので、帰宅するなりポチッと買ってしまった。

待つこと数日、現物が手元に届く。……うむでかい。醸し出されるコックピット感。店内で見るよりずっと存

在感があつてかさばる。これは運搬も大変だ。かつ窓口仕事で自分のデスクに日中二時間足らずしか着席しない私には、置き場所も悩みどころ。まさか自分と一緒に移動するわけにもいかない。あれこれ考えた挙句、ひとまず自宅に置くことにして、この原稿もそれに座って打っている。快適だ。

昨夜、ふと見ると猫がそこで寝ていた。彼女は姿勢の矯正など一度も考えたことはないだろうが、カーブした形状がフィット感があつていいらしい。ぴったりはまり込んでいる。和んだ。



・編集後記:

スゴ座布団以外にもさまざまな健康・美容グッズがあつて、しばし虜になりました。でも考えてみたら、身体はひとつしかないですもんね。

ドラメリア (編集長)

一月始め、県立図書館での講演に招かれて、南陀楼綾繁さんが来鳥ひさしぶりの再開もあったのですが、「ミニコミ魂」をなつかしがってください、今号に寄稿してくださいました。 奈良敏行 (発行人)